

アメリカ社会学会における利他主義セクションの可能性 —P. A. ソローキンの統合主義社会学の視点が投げかけるもの—*

吉野浩司**

Possibilities of Altruism Section of American Sociological Association:
From the Perspective of P.A. Sorokin's Integral Sociology

Koji YOSHINO**

はじめに

現代におけるソローキン研究は、しだいに利他主義研究へと収斂していくかたちで展開している。近年のロシアのソローキン研究所の活動（吉野、2016）や、最近のイタリアでの研究書（Merlo, 2011）の出版などを見ても、そのことは明らかである。わけても2011年8月にアメリカ社会学会の組織の中に組み込まれた、「利他主義、道徳性、社会的連帯セクション」（ASA Altruism, Morality, and Social Solidarity Section、以下「利他主義セクション」と略記）の立ち上げは象徴的なできごとであった。このセクションの設立趣意書にもあるように、P. A. ソローキン（Pitirim A. Sorokin, 1889-1968）の名前は、デュルケーム（Emile Durkheim, 1858-1917）やアダムズ（Jane Addams, 1860-1935）らとともに、利他主義研究分野の創始者としての地位を与えられている（Jeffries, 2014: 4）。

はじめに本稿の目的¹を示しておく、下記のようになる。第1に、この「利他主義セクション」の現在の研究動向を紹介すること。第2に、その動向をソローキンの統合主義（Integralism）の観点から評価し直すこと²。この2点である。現在、利他主義セクションは新設のセクションらしく、活発な議論が行われている。2014年には、そうした研究領域を概観できるような案内書『パルグレイヴ・ハンドブック利他主義、道徳性、社会的連帯—研究分野の組織化』が、同セクションの主要なメンバーによって出版された（Jeffries ed., 2014）。ソローキンの統合主義の立場からすると、現在、多様なかたちで展開されている利他主義研究は、どのように評価しうるのか。それが本稿の最終的な目的である。

1. 利他主義研究とソローキン

アメリカ社会学において、利他主義が研究対象とされたのは1950年代のことである。その拠点となったのは、1949年2月に設立されたハーバード大学内に設置された「創造的利他主義センター（The Harvard Research Center in Creative Altruism, 1949-1959）」である。本センターは、ソローキンの研究に共鳴したエリー・ライリー財団が、ハーバード大学に資金提供を行うことによって設立された（Sorokin, 1963: 279）。センターの名称にも用いられている「利他主義」とは、一体どのような立場を指しているのだろうか。端的にいうとそれは、他人に善をなしたり、利益をもたらしたりすること、となる。利他主義研究開始の宣言文とも取れる『ヒューマニティの再建』³において、ソローキンは、利他主義を下記のように定義している。「個人が他人の幸福のために、自分の正当な利益をすすんで犠牲にし、自分の法律上の権利がそうする資格を有していても、他人を害することを止め、法律がそのような行為を要求しなくても、様々な方法で他人を助ける」ことである（Sorokin, 1951: 79）。

創造的利他主義センターの成果としては、いくつかのシンポジウムを主催したり、ソローキン自身、利他主義研究の方法論体系化を行ったりもしている。それらは、『利他愛』（Sorokin, 1950）、『シンポジウム』（Sorokin ed., 1950）、『愛の方法と力』（Sorokin, 1954）といった一連の著作としてまとめられている。その意味では、ある程度の成功を納めたと言えるのは確かである。しかし、この分野が、社会学や関連分野において、確固たる地位を獲得できたのかと言えば、そうではなかった。ソローキンの希望はかなわず、これまで利他主義や愛に関する研究が、関連分野の一分野を形成するには至らなかった。そのことの意味

* Received January 12, 2017

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

は、慎重に考えなければならない。

むしろそれには、それなりの理由があったと考えられよう。例えばこれまでの社会学は、社会にとって害を与えるような否定的事象を、主たる研究課題にしてきた。一般に、善い行いはニュースになりやすく、悪い事件が大きく報道されるといふ。利他主義研究が広まらなかった理由は、そうしたマスコミにおける現状とも同じ根を持っているように思われる。

これらの事情もあって、結局のところソローキンが大学を引退するとともに、同センターは閉鎖されることとなった。ジェフリーズも言うように、社会学の確立期においては、確かに善なるものや利他主義についての研究がなされていたのかもしれない。1950年代のソローキンが、よりいっそう科学的に洗練されたかたちでそれを示した。しかし、ここ50年の間は、それがまったく等閑に付されてきたというのが実情である (Jeffries, 2014: 4)。

それが半世紀の沈黙を経て、いままたソローキンの名とともに利他主義研究が息を吹き返すようになったのは、どのような理由からであろうか⁴。よりよい社会へ向けて、あるいは望ましい未来に向けて、ありうべき価値観を提示するような研究、そうした研究が、従来の社会学のテーマに劣らず重要なテーマである。そのような認識が、社会学及び関連分野の中で広まったからではないだろうか。アメリカ社会学会内での利他主義セクションの設置が実現した理由の1つは、そうした未来の社会を展望するような研究成果を期待されたことなのである。

そして、そのことは、ソローキン再評価の機運とも軌を一にしているように思われる。利他主義セクション設置の主たるメンバーは、エドワー

ド・A・ティリヤキアン (Edward A. Tiryakian, 1929-)、バリー・ジョンストン (Barry V. Johnston, 1942-2011)、ヴィンセント・ジェフリーズ (Vincent Jeffries)、彼らはいずれも、ソローキン研究でも重要な業績を残してきた人たちである (Tiryakian, 1963; Johnston, 1996; Jeffries, 2005)。また現在、ロシアにおけるソローキン研究の中心地の1つとなっているスィクティブカル大学からアメリカに渡り、ソローキン協会 (Pitirim A. Sorokin Foundation) を作ったパヴェル・クロトフ (Павел Кротов) も、このセクションの設立に、大きな寄与を行った一人である。

こうした利他主義とソローキンの双方に関する研究の盛り上がりを目の当たりにして、ソローキン研究者としてどうしても想起しておきたいことがある。それは、ソローキンが自らの壮大な統合主義社会学の総仕上げとして、利他主義研究を開始したという事実である。ソローキンは、1937年に出した『社会的・文化的動学』(以下『動学』と略記)において、世界文明史を統計的に分析してみた。そこでの結論の1つが、16世紀以降、しだいに戦争や紛争が多発する時代になったというものであった。もちろん、この結論の内容自体には、さして目新しい主張は含まれていないのかもしれない。シュペングラー『西洋の没落』やトインビー『歴史の研究』などの、悲観的な比較文明論の主張と大差ないように思われる。ただしソローキンの研究の際立った特徴は、むしろそうした結論を、確かな統計的数字でもって示したところにこそあると言わなければならない。そこで彼は、「感覚的 (Sensate)」、「観念的 (Ideational)」、「理想的 (Idealistic)」という用語を使って、世界史上、何度か訪れた同様の危機的状況を比較する視点を提供したのである。

¹ 本稿は2016年10月8日に九州大学で開催された社会学会での報告原稿をもとに作成されている。筆者の報告に対しては、有益な質問を数多くいただいた。この場を借りて謝意を表したい。

² ソローキンの生涯にわたる学問と思想を、統合主義をキーワードにしてまとめたものとしては拙著を参照のこと (吉野, 2009)。

³ 一般にソローキンの利他主義研究は、1948年刊行の『ヒューマニティの再建』(Sorokin, 1948) によって提唱されたことになっている。しかし1947年刊行の『社会・文化・パーソナリティ』(Sorokin, 1937) の段階で、かなりのていど整備されたかたちでの利他主義研究が構想されていることは注目にあたいよう。さらにいうなら、ソローキンの利他主義研究の思想的根拠としては、『社会的・文化的動学』における倫理システムの波動に関する議論にもさかのぼって検討を加えてみる必要がある。それにより、ソローキンがなぜ利他主義研究へと向かわなければならなかったかが、明らかとなろう。彼の自伝にもそのことは明記されている (Sorokin, 1963: 268)。

⁴ なぜ今ソローキンが脚光を浴びているのか。この問いについて、さらに巨視的な現代史の流れから概観してみると、次のことが言えるかもしれない。1990年代における冷戦構造の崩壊と世界新秩序の探求、2000年代における各地でのテロの問題、2010年代における新秩序ではなく多文化共生の模索。これらはしだいに規模と激しさを増していく、価値観の対立であるように思われる。対立の中から新たな価値観を見出さなければならないときに、ソローキンの統合主義のことが思い出されているのではないだろうか。「対立物の一致 (coincidentia oppositorum)」が、ソローキンの統合主義の1つのキーワードであった。

感覚的時代から観念的時代への移行期特有の、戦争と紛争という社会現象を統計的に明らかにしたところに、彼の研究の独創性はある。その危機の時代を乗り切るための処方箋、それこそが利他主義に他ならない（吉野, 2006: 166-168）。個々人の意識の変革、すなわち人間のパーソナリティを利己主義から利他主義へと転換することは可能なのか。可能ならば、それはどのようにしてか。そのことが、ソローキンにとっての究極の課題であった。

2. アメリカ社会学会利他主義セクションの研究領域

設置当初から現在にいたる利他主義セクションの研究動向を見てみると、セクション内でも多様な分野での展開がなされていることに気付かされる。それらの中には、利他的パーソナリティの分析、戦争と紛争の解決策の探求、グローバルな社会運動、NPOやNGOによる社会問題の解決、ジェンダーやボランティアなど、実に多様なトピックが含まれている。それらは、それぞれ個別的研究の立場から利他主義研究を深めるものとなっているのは間違いない。しかしその一方で、これらの成果を、より実りの多いものとするためには、個々の研究の相互連関性を明らかにしておくことも不可欠なのではないだろうか。ソローキンの統合主義的な利他主義研究が、今もって異彩を放つところがあるとすれば、それはこの点をおいてほかにない。

そうした観点から、上記のハンドブックを読んでもみると、マッシュュー・リーの論文が、特に注目し値するように思われる。彼の論文は、さまざまな身近な社会問題（禁煙運動）のみならず、宗教にからんだ社会的事件（抗議のための焼身自殺）にいたるまで、実に様々な題材をあつめて、それらに共通する要素をあぶりだそうとしているからである。その際のキーワードは「道徳性 (morality)」であった。この語を切り口に、彼は整合性のとれた利他主義研究を構築しようと努めている (Lee, 2014)。

リー論文の主眼は、セクションの名称にもなっ

ている「道徳性」の語を、「利他主義」と「社会的連帯」の共通基盤として位置づけることにあった。取り上げられている事例は、かなり広範囲にわたる。その一例をあげると、次のような下記のようなになる。

- 2013年にスリランカで起きたムスリムのハラールを批判する仏僧の焼身自殺
- 1960年代に南ベトナムで起きた仏教弾圧に抗議する僧侶の焼身自殺
- 現代のキリスト教教会のホーリネス・ペンテコステ派で行われているスネーク・ハンドリング
- キリスト教の一派による人種分離主義
- 依存症の克服をめざす団体アルコールクス・アノニマス (AA) の活動

これらに共通する基盤を見つけることは可能なのだろうか。リーはこれらを「道徳性」という言葉でくくることで、利他主義研究の共通基盤を構築しようと目論んでいる。ただし、ここで付言しておかなければならないことがある。それは「利他主義・道徳性、社会的連帯セクション」の設置が計画された2009年当初は、この「道徳性」の語はなかったという事実である。2011年に設立されるまでのあいだに、創設者の一人でもあるリーが、ジェフリーズその他の学者と会話するなかで、新たに後に付け加えられた語だ、ということが述べられている (Lee, 2014: 313)。

確かに利他主義という考え方は、価値観として中立であるとは言いきれないところがあるかもしれない。利己主義あるいはことによると個人主義の立場⁵とも、するどく対立してしまいかねないからである。それにまた、社会的連帯という語にも似通ったところがあり、ある価値観を前提としているような印象を受ける。その意味で、道徳性という用語を付け加えたことは、賢明な処置であったと言えるだろう。

実際、利他主義と言えば、専門家の間では語られることはあるものの、非専門家の間では疑わしいものとして、退けられることもある。あるいは

⁵ 利己主義ないし個人主義、あるいは利他主義には、それぞれの長所と短所がある。例えば利己主義ないし個人主義は、他者を無視して個人の中だけで行為を完結させることができる。一方、利他主義は他者がいるところでなければ、そもそも成立しえない。その意味で、利他主義はきわめて他者依存的、連帯的な立場であると言えるだろう。しかし利己主義ないし個人主義にも、利点がある。それは責任感を持てる可能性があるという面である。その点、利他主義というのは、自我意識、個人意識が弱い分、責任を取るべき主体があいまいになってしまうという欠点を有している、といえるのかもしれない (Jeffries, 2014: 13)。

逆に、好意的に受け取られている場合であっても、利他主義者とはそうとうの犠牲を覚悟しなければならないものである、と想定されているところがある。しかし、それらは利他主義の正しい理解とは言えない。苦労や犠牲、あるいは時に死さえまぬがれない他人への奉仕という行為には、究極の目的がある。行為者にとってその行為とは、避けようとして避けられるようなものではない。例えば、自分の家族の世話をする場合を考えてみたい。そこでは苦労や犠牲などということは背後に追いやられている。かえって世話という行為自体に、何らかの意義や喜びが見出される。そうでなければ、家族関係を継続することなどできないだろう。そうしたことの体験や気づきは少なくない。それと似た、他者との関係の結びつきが、利他主義にもあるというのである⁶。その意味で利他主義とは、費用対効果の関係ではなく互恵的關係であると言える。他者の懐疑的な見方などとは無関係に、利他主義的行為を行う本人たちにとって、その行為とは犠牲などではない。それどころか、有意義で喜ばしい行為以外のなにものでもない (Lee, 2014 : 314)。

3. 利他主義的行為の諸相と意味

このように、利他的行為には苦労や犠牲という発想はない。端的に意義あるものとして、その行為はなされている。そのことを前提とした上で、リーが取り上げる「仏僧による焼身自殺」、「スネーク・ハンドリング」、「アルコールクス・アノニマス」などの事例について、簡単にまとめておきたい。

仏僧による焼身自殺

2013年5月24日、ある仏僧(Bowatte Indarathana)が、スリランカで、ムスリムのハラールを批判する目的で、焼身抗議を敢行するという事件が起きた。メディアはこれをセンセーショナルに取り上げただけで、事件の経緯の説明ならびに理解を欠いていた。仏僧による焼身抗議といえ、何も今に始まったことではない。1960年代に南ベトナムで起きた、仏教弾圧に反対する僧

侶の焼身抗議がそれである。この時の報道にも、今回のメディアの対応と同じ構図が見取れる。当時、西側諸国の新聞では、一様にこの抗議行動を自殺であると見なしたからである。

しかし、これらの行為は、はたして自殺なのだろうか。リーはそう問い返す。彼の考えでは、この行為は自殺でもなければ、単なる抗議でもない。あるいは失望からくる自暴自棄の行為などではさらさらしない。かえって、将来への勇気ある、希望に満ちた行為である。

リーの解釈によれば、こうした行為は、ある種の「道徳性」からもたらされる。自己の利害や価値を否定し、利他主義を広めるために、進んで行われる自己犠牲である⁷。その限りでは、創造的利他主義的行為に他ならない、とリーは断言する (Lee, 2014 : 319)。

ここでは「道徳性」が、仏教徒による自己犠牲(抗議のための焼身行為)を理解する鍵となっている。仏教における無我の教えは、確固不動の自我というものがなく、そして、われわれは反復する流れ(輪廻転生)の中にあること、そのことを説いている。また自我にとらわれ過ぎたときに、苦悩や道徳に反する行為をひきおこしたり、他人に共感する気持ちを失ってしまったりする。このような道徳性を文化背景として持っている集団においては、利他主義的な「自殺」という現象が起こりやすい。自我を離れ、悟りを開いた者だけが、輪廻転生のサイクルからぬけ出すことができるからである (Lee, 2014 : 320-321)。

これが、自分の死を自ら決定する、という通常の意味での自殺と違うのは明らかである。なぜなら、死を選ぶ自分(自我)というものがいないからである。この限りにおいて、焼身抗議の行為による死は、自殺ではない。

スネーク・ハンドリング

次に取り上げるのは、スネーク・ハンドリングである。ホーリネス・ペンテコステ派に属するキリスト教教会の中に、信仰心があれば毒蛇にかまれることもないという信念のもとで活動

⁶ ソローキンは家族関係を利他主義のモデルとして提示している (Sorokin, 1947, pp.99-100)。むろんここでいう「家族」というのは、理想型としての「家族」であり、多様な在り方を持つ現実の家族を否定するものではないことは、いうまでもない。

⁷ むろん行為者自身には、「広めよう」あるいは「自己犠牲」という気持ちはない。ただ端的に、利他主義的行為を行っているに過ぎない。

を行っている一派がいる。素手で毒蛇を握ったり、その毒蛇の毒をあおったりする。それがスネーク・ハンドリングである。典拠となっているのは、『旧約聖書』にある「青銅の蛇」の逸話である⁸。あるいは、より直接的には『新約聖書』「マルコの福音書」にある。「蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます」(第16章第18節)。この聖書にある文言を、文字通り実践しているのが、スネーク・ハンドリングである。

信者にしてみると、そうした危険と思われる行動をとることこそ、人間の限りある人生を乗り越えようとする道徳性の試みに他ならない。それと同時に、教会側してみると、そうした神の命令でもある儀式を行うことで、組織を新鮮なまま保つことができ、宗教性を取り戻すことができるようになる。そこには、健康や教育といった「進歩的」な考えは介在しない。こうしてスネーク・ハンドラーは、神に対する信念と信頼、そして神との連帯意識を強めることに成功している。

これを図式的に言い直すと、次のようになる。「道徳性」への従順さが、感情的に激しい儀式の遂行を支えている。そのことで、一方では死ぬ可能性を含みながら、他方においては、高レベルの社会的連帯を獲得している、ということになる。そして、それがそのまま教会を新鮮に保つための利他主義的行為を促すことともつながっている (Lee, 2014 : 323-324)。

宗教においては、時間とともに儀式が陳腐化し、活力をなくしていくことは、ごくありふれたことであろう。スネーク・ハンドリングは、その陳腐化をまぬがれるような機能を果たしている。たとえ蛇に噛まれて死ぬことがあったとしても、スネーク・ハンドリングは、信仰心のドラマチックな表現であることにはかわりはない。

確かにこの行為も、自らの命を掛けてまで集団の道徳性である、神への従順さを示すとともに、集団の連帯の根幹にかかわる儀式を続けている。その意味では、スネーク・ハンドリング

は利他主義的行為であるといってもいいだろう。

アルコールクス・アノニマス

アルコールクス・アノニマス (AA) は、アルコール依存症の克服を手助けする団体である。さしあたっては、いかなる宗教とも距離を置いているとされる。しかし、もとはというと福音派キリスト教に属するオックスフォードグループの運動から発生したものである。AAには、アルコール依存症克服の手順として、十二ステップと言われる独自の実践マニュアルがある。それを示すと、下記の通りである。

1. 私達はアルコールに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
2. 私達は自分より偉大な力が、私達を正気に戻してくれると信じるようになった。
3. 私達の意志と生命の方向を変え、自分で理解している神、ハイヤーパワーの配慮の下に置く決心をした。
4. 探し求め、恐れることなく、生きてきたことの棚卸表を作った。
5. 神に対し、自分自身に対し、いま一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
6. これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
7. 自分の短所を変えて下さい、と謙虚に神に求めた。
8. 私達が傷つけたすべての人の表を作り、そのすべての人達に埋め合わせをする気持ちになった。
9. その人達、または他の人々を傷つけない限り、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
10. 自分の生き方の棚卸を実行し続け、誤った時はただちに認めた。
11. 自分で理解している神との意識的触れ合いを深めるために、神の意志を知り、それだけを行っていく力を祈りと黙想によって求めた。
12. これらのステップを経た結果、霊的に目覚め、この話を他の人達に伝え、また自分の

⁸ エジプトを離れたイスラエルの民が、苦しみに耐えかねて神とモーゼに不平を言った。「なぜ、あなたがたは私達をエジプトから連れだしてこの荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。私達はこのみじめな食物に飽き飽きした」と。神はこれに怒り民の中に蛇を放つと、多くの者が死んだ。民が神とモーゼに言う。「私達は主とあなたを非難して罪を犯しました。どうか蛇を私達から取り去ってくださるよう、主に祈ってください」。神はモーゼに、「貴方は燃える蛇を作り、それを旗さおの上につけよ。すべてかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる」といった (『民数記』第21章)。

あらゆることに、この原理を実践するように努力した。⁹

この十二ステップを見ても、「偉大な力」や「神の意志」、「祈りと黙想」、あるいは「霊的に目覚め」ることなどが説かれている。自我への囚われを離れ、自己を超えた超越的な何ものかとの触れ合いを重視しているという点では、確かにある種の道徳性を有する運動であると言えるだろう。

AAが依存症を克服するための理路は、下記の通りである。依存症は、自分本位の考えからくる。あるいは、与えられた人生を生きることを拒もうとすることによって、依存症は生じる。したがって、より高次の力に触れることで、自己中心性の宿命を克服しようと努めなければならない。それに成功すれば、自然と依存症からも脱却できるというのである。依存の道徳性の根は自分本位の考え方にあり、そこからぬけ出すための道徳性は利他主義に他ならない。これが十二ステップの流れである。

上記のベトナム仏教徒のいう無我とは、当然、違っているところも多いのはいまでもない。けれども「自我からの移行をめざすスピリチュアルな発展の道」を進んでいくという教え、すなわち無我という道徳性においては同一の理路がうかがえるのも事実である (Lee, 2014 : 327)。

4. 「道徳性」による利他主義的行為の統合的理解

以上のようにリーの論文は、多様なかたちで現れる宗教的な利他主義の実践を、「道徳性」や「社会的連帯」をキーワードに、それぞれの相互関係を明らかにしようとして努めている。それによって、偏見や即断や無理解を退けよう、としているのである¹⁰。その相互関係を図示すると、下記の

ようになる。

道徳性と社会的連帯と利他主義の関係

道徳性：特定の振る舞いを「善」と見なし、かつ連帯の発展へと導く、意味コードの共有を行為者にもたらす

↓

社会的連帯：集団に「善」と見なされている、さまざまな目的のある行為を力づけ調整する、強い一体感と統合感

↓

利他主義：連帯により力添えを得ており、また集団の道徳性により「善」だと表明されている、他人に利益を与える特定の行為

(Lee, 2014 : 316)

だが、ひるがえって考えてみるに、例えば利他主義の実践は、ハラルを批判する僧侶の焼身行為のように、周囲の人に対し、奇異なものとして、あるいは脅威を与えるものとして捉えられるかもしれない¹¹。異質なものを感じるということは、異質な道徳性を有しているからに他ならない。言うまでもなく、道徳性は無数に存在する。しかし利他主義を実行する人々は、そうした道徳的相対主義などに、さしたる関心を払わない。自らの信念に基づいた行為を行うのみである。社会学者の任務はここにある。すなわち社会学者は、そうした多様な道徳性が併存して現れている状況に、目を向けなければならない (Lee, 2014 : 328-329)。そして道徳性の違いばかりではなく、道徳性の共通基盤を作り出すことが必要である。独善的ではない道徳性を立ち上げなければならないのである。

集団ごとに違う道徳性は、利他主義を広めようとするものにとって障害となっている。文化的多元主義 (cultural pluralism) の名のもとに、それら複数の道徳性を認めるといふ寛容な態度も、

⁹ 日本におけるAA団体の1つ、アラノンのHP (<http://www.al-anon.or.jp/about/property.html>) を参照のこと。

¹⁰ むろんリーはこのような述べているのは、単に偏見を退けようとしているだけであって、先述の宗教的な実践を推奨しているわけではない。

¹¹ 利他主義的行為とは、カルトや危険思想、悪くするとテロリズムにも発展するおそれがあるのではないかと。確かにそうした危険性は否定できない。しかし、そうであるからこそ、利他主義の中にある良質の部分を選び分けていく作業というのが必要となろう。そうでなければ、利他主義の有する価値そのものをも見失うことになるからである。ジェフリーズは、その選り分け作業には、ある種の指標を用いることが重要であるとしている。一例を挙げると、オリナーの指標が有益であるとジェフリーズはいう (Jeffries, 2014 : 10; Oliner, 2011:129-161)。ソローキンの指標に類する、オリナーによる利他主義の選り分け指標としては、下記のものがある。「広がり」、「強度」、「継続性」、「純粋性」、「充足性」など。こうした指標を使って、危険性のない利他主義を見極め、それを持続的、かつ広範囲に広めていくことは、現代の利他主義研究にとっての重要な課題であるといえる。

暫定的な対処法としては容認してもいいだろう。しかし、それはあくまでも一時的な処置でしかない。複数の価値観をそのままの形で併存させておくことは、必ずどこかで軋轢を生じる結果となる。移民や諸外国への寛容の態度を取り続けてきた結果、国内では鬱積したナショナリズムが噴出するという現象は、現在、世界各地で確認することができることではないだろうか。

それならば、どのような対策が好ましいというのであろうか。多様性を認めつつ1つの価値観のもとであつまる、多文化主義 (multiculturalism) という考え方がある。文化は多様であるが、その先にある道徳性は1つである。それが、この多文化主義の根底にある考え方である。リーが「目的の交錯するような利他主義的行為に甘んじて留まることさえなければ、共通する道徳基盤を築くことで、利他主義を高める先蹤となる」(Lee, 2014: 329) と述べているのは、このことを指しているのではないだろうか。まずは手始めとして、すべての人が共有できる道徳的ビジョンを広めること、そして部族主義を克服すること、その上で共有された道徳性をまとめ上げていくことが肝要である。したがって、「共通の道徳性が作られるまでは、利他主義や社会的連帯というものは、破壊的にもなれば、有益なものともなるのである」(Lee, 2014: 330)。これがリー論文の結論であった。

5. 統合主義社会学としての利他主義研究

上の2つの節では、リーの論文に依拠して、中心に利他主義研究の広がり、それをまとめる視座とを提示した。そこで本節では、ソローキンによる利他主義研究の立場からリーの立場を再解釈することで、より一般的な視野を獲得することにした。

ソローキンの統合主義社会学が、現代の利他主義研究に貢献しうることがあるとすれば、それはどういうところであろうか。それはリーのいう「共通の道徳性」を構築するという作業において他にない。そのことを知るためには、ここでソローキンのパーソナリティ論 (意識構造論) を再考しておかなければならない。

ソローキンによると、人間の意識は4つの部分からなる。「生物的無意識」、「生物的意識」、「社会文化的意識」、「超意識」の4つである。それらを簡単に説明すると、下記ようになる。「生物的無意識」とは、本能や生理的欲求を指してい

る。餓えや喉の乾き、生存競争などはこれに属する。次の「生物的意識」とは、本能や生理的欲求からくる不快感を、積極的に取り除こうとする意識の働きを指している。雌雄 (男女) や老若を認識できるのも、この生物的意識の次元においてである。自分の空腹を満たすために、他人や集団のものを盗み取ることもあろう。それにより盗られた者あるいは集団は、攻撃を仕掛けてくることもある。その意味で、この意識の段階では、心的ストレスが大きく、心の平穩からは程遠い。

そこで、そうしたストレスを回避しようとするのが、「社会文化的意識」である。仲間を作り、その集団のものを盗らないようにするとか、仲間に危害を加えないようにするなどということが行われる。それらが定着すると、伝統や習慣、あるいは法的規範へと発展する。集団内での取り決めや掟、あるいは法といったものが生じてくるのは、この意識の段階である。しかし、ここでもやはり、心の中に矛盾や葛藤が生じてこないというわけではない。外の集団が持つ異質な伝統や習慣との対立は避けられないし、また同一集団内であっても、掟や規律に従いたくない成員も必ず存在する。戦争や紛争が絶えないのも、そうした対立が不可避だからである。リーの議論に寄せて言い直すとすれば、複数の道徳性が併存している現代の状況が、この意識の対立を表しているといえるだろう。社会の規範と自らが持つ道徳心、あるいは伝統などが互いに矛盾しあうことがある。では、これらの矛盾や対立を、究極的に解消するものなど、はたしてありうるのだろうか。ソローキンは解消するものがあるとした。その際に仮説として持ち出したのが、「超意識」である。

「超意識」とは、一体どのような心の持ちようを示しているのであろうか。意識の中で矛盾と葛藤が起きる原因は、自我にある。個人の場合は利己主義、集団の場合はナショナリズムや自民族中心主義などの形態をとる。それらは個人間や集団間で、互いに対立関係を生じることがある。そのような場合に、多様な形であらわれる社会文化的意識の対立を調停する役目を担うのが超意識である。

それは自我意識や利己主義の程度を低め、他者を中心に据えた発想と行動へと赴かせる。ソローキンはこの「超意識」を、「人間における神的なもの」、「真、善、美の高尚なエネルギー」、「最高度の創造的才覚」などと表現する。そしてまた利他主義への気付きも、この超意識の働きによって

もたらされることとなる(吉野、2009:170-178)。

超意識に根ざした利他主義的行為の身近な実践例として、ソローキンはキリスト教における「善き隣人 (Good Neighbors)」を挙げている。キリスト教においては、超越者(イエス)が人々の苦難(原罪)を引き受けた。その超越者の姿に気付いた人は、信仰者としてその超越者の「似姿」として自らを擬する。超越者に擬した行為が、「善き隣人」の利他主義的行為に他ならない(Sorokin, 1950)。

利他主義を単なる独善的な行為に終わらせないためにも、超意識の導きが必要なのである¹²。リーが主張する「共通の道徳性を築くこと」、これがソローキンのいう超意識への気付きと密接に関連していることは、ここで強調しておきたい。

ソローキンは利他主義のモデルと考えていた行為の1つに、『聖書』にある「山上の垂訓」がある。そこで説かれているのは、隣人のみならず、敵をも愛することである。敵を愛することは、自らを怪我や生命の危険にさらすことを意味する。これを実践することは、明らかに「過剰(excessive)」な行為であると言える(Lee, 2014:318)。自らを危険にさらすばかりではない。過剰な自らの行為によって、他人さえも恐怖に陥れてしまうことさえある。ベトナムの物騒の焼身抗議が、見ているものに恐怖を与えたように。これが現代における利他主義的行為の困難さの原因である。現実において、利他主義というものは、個々人の世界観しだいである。したがって、たとえば、ある人や集団にとっては肯定的なもの(善)であろうとも、別の人や集団にとっては否定的なもの(脅威)となりうる。当然、そこには対立が生まれるだろう。利他主義を促進するという運動も、ある意味では、他の人々との対立や軋轢を生むことは避けられない(Lee, 2014:315)。

結論

個々人が継続的に利他主義的な行為を実践する現場においては、さまざまな困難が存在する。それらは、本稿で述べた宗教的利他主義に限らず、

NPOやボランティアなどでの身近な実践においても同じである。ともすると、そこで出くわす困難のために、利他主義的行為を、途中で投げ出してしまうことさえある。ソローキンの利他的パーソナリティ論は、単に、利他主義者の意識構造や行為を論じるに留まるものではない。利他的行為を持続しうる可能性についても触れている。

個人的自我や集団のエゴが対立的な場面に遭遇するとき、そこにはより上位の意識があることをソローキンのパーソナリティ論は示唆している。本人がいくら利他主義的であると思っけていても、周りの人との対立がある場合には、それを克服するより高次の意識と考え方が存在する。

現状においては、利己主義と利他主義の対立の関係の中から、それを克服する、より高次の意識ないし考え方を作っていかねばならない。対立の中にこそ、その答えは見つかるのではないだろうか。リーが現実の利他主義的行為の中に「共通の道徳性」を見出そうとしていることは、ソローキンのパーソナリティ論でいうところの「超意識」と、どこか通じるものがある。

利他主義的行為は連帯を必要とする。しかも狭い意味での連帯ではない。すなわち既存の宗教団体、あるいは国家や民族の枠組みを、乗り越えるような連帯である。ある種のグローバルなネットワークを持つ連帯、しかも常にそのつながりが拡張していく形での連帯、それが利他主義にとっての不可欠の条件としなければならない。その限りにおいて、利他主義的实践への危惧や懐疑は解消され、価値あるものと見なされるようになるだろう。

※ 本研究は科研費 基盤研究(C)「研究課題：初期ソローキン社会学にみる利他主義研究の萌芽—ロシア時代の未公開・新資料の分析」(16K04043)の助成を受けたものである。

¹² 利己主義のない自己中心主義的な利他主義というものもあり得るということについては注意が必要である。自らの強い意志をもって、あるいは自分を犠牲にして行う行為には、確たる自我の存在がある。そこには危険性がある。他者を生命の危害に陥れてでも、自己の「利他主義的」行為を完結させる、とする理屈を許すからである。現在各地で行われている自爆テロその他のテロリズムも、その一種である。

自己愛と利己主義を区別することで、利己主義を克服する可能性が開けることを示唆した学者に、エーリッヒ・フロム(Erich Seligmann Fromm, 1900-1980)がいる。フロムについては、さしあたり(出口、2002)を参照のこと。

<文献>

- 出口剛司、2002、『エーリッヒ・フロム—希望なき時代の希望』新曜社。
- Jeffries, Vincent, 2005, “Pitirim A. Sorokin's Integralism and Public Sociology,” *The American Sociologist*, Vol. 36, No. 3/4 (Fall - Winter, 2005) , pp. 66-87.
- , 2014, Altruism, Morality, and Social Solidarity as a Field of Study pp.3-20 (in Jeffries, V. ed., 2014) .
- Jeffries, V. ed., 2014, *The Palgrave Handbook of Altruism, Morality, and Social Solidarity: Formulating a Field of Study*, Palgrave Macmillan.
- Jeffries, Vincent and Barry V. Johnston, Lawrence T. Nichols, Samuel P. Oliner, Edward Tiryakian, and Jay Weinstein, 2006, “Altruism and Social Solidarity: Envisioning a Field of Specialization,” *The American Sociologist*, Fall 2006, pp.67-83.
- Johnston, Barry V., 1996, *Pitirim A. Sorokin: An Intellectual Biography*, University Press of Kansas, p.416.
- Lee, Matthew T., 2014, “The Essential Interconnections among Altruism, Morality, and Social Solidarity: The Case of Religious Altruism,” pp.311-331 (in Jeffries, V. ed., 2014) .
- Merlo, Valerio, 2011, *Il miracolo dell'altruismo umano: La sociologia dell'amore di P.A. Sorokin*, Armando editore: Roma.
- Oliner, Samuel P., 2011, *The Nature of Good and Evil*, St. Paul, MN: Paragon House.
- Sorokin, P.A., 1947, *Society, Culture, and Personality: Their Structure and Dynamics*, Harper and Brothers, 1961, 『社会学の基礎理論—社会・文化・パーソナリティ』(内田老鶴圃).
- , 1948, *The Reconstruction of Humanity*, Beacon Press, 1951, 『ヒューマニティの再建』(文藝春秋社).
- , 1950 [2010], *Altruistic Love: A Study of American Good Neighbors and Christian Saints*, Kessinger Publishing. 1985, 『利他愛—善き隣人と聖者の研究』(広池学園出版部).
- , 1954 [2002], *The Ways and Power of Love: Types, Factors, and Techniques of Moral Transformation*, Templeton Foundation Pr., 1977, 『若い愛・成熟した愛—比較文化的研究』(広池学園出版部).
- , 1963, *A Long Journey: The Autobiography of Pitirim A. Sorokin* Rowman & Littlefield Publishers.
- Sorokin, P.A., ed., 1950, *Explorations in Altruistic Love and Behavior. A Symposium*, The Beacon Press.
- Tiryakian, Edward A. eds., 1963, *Sociological Theory, Values, and Sociocultural Change: Essays in Honor of Pitirim A. Sorokin*, Free Press of Glencoe, p.302.
- Weinstein, J., 2000, “Creative Altruism: Restoring Sorokin's Program of Applied Sociology,” *Journal of Applied Sociology*, vol.17, pp.86-117.
- Wuthnow, Robert, 1993, “Altruism and Sociological Theory,” *Social Service Review*, Vol. 67, No. 3, Altruism (Sep. 1993) , pp. 344-357.
- 吉野浩司、2006、「P. A. ソローキンの戦争社会学—利他主義による対立物の一致」、新原道信他編『地球情報社会と社会運動—同時代のリフレクシブ・ソシオロジー』ハーベスト社、pp.81-99.
- 、2009、『意識と存在の社会学—P. A. ソローキンの統合主義の思想』昭和堂。
- 、2016、「<研究動向>「長い旅路」のはじまり—ロシア・コミ共和国におけるソローキン研究動向を中心に」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第14巻第1号、pp.71-83.

